

在日韓国人の家族と私

兵庫県 尼崎市立南武庫之荘中学校 1年

尹 雅美(ゆん あみ)

私は在日韓国人です。私が在日韓国人であるという事実をはっきりと理解したのは、小学五年生の夏休みでした。

私は、両親、祖母と弟の五人で、父の故郷(=本籍地^{ほんせきち})にあたる場所を訪れることとなったのです。

日本に移住してきた私達と、韓国の親せきが同じ一族として再会するのは、実に約五十年ぶりのことでした。

私達家族にとっては、初めて会う韓国の親せきでしたが、優しく接して下さいました。私の祖母が、仲良く韓国語で話している姿を見ると、とても嬉しく、幸せな気持ちになりました。

又、家系図が大切に保管されてあって、太古の昔からの名前が記された、何十冊にもなる資料を見せてもらいました。そして、そこに私の名前が書き加えられることとなったのです。

今まで、在日韓国人であるということを、あまり意識していませんでしたが、このとき、はっきりと自分自身のルーツについて、知ることができたのです。

日本と韓国、二つの国の文化を持ち合わせる自分、在日韓国人なんだ、と理解できました。「二つの故郷があるなんて、素敵だなあ。」と思いました。そこに、マイナスのイメージは全くありませんでした。

私は、この韓国旅行の思い出を、小学校の夏休みの課題として、新聞というかたちで残すことにしました。私なりに、韓国の故郷について調べたり、考えたりして、心を込めて作った新聞でした。

夏休みの作品展で、私の新聞は好評だったらしく、学校の代表として市のコンクールに出品するという話になりました。ですが、当時の担任から、

「やっぱり、市のコンクールには出品できないと思います。」

と言われました。私は、理由も分からず、涙が止まりませんでした。

その夜、家に先生から連絡がありました。

「学校内で、在日韓国人だということを発表するのは、問題ありません。ですが、市のコンクール入選となると、不特定多数の人に、その事実を知られることとなります。何かあってはいけませんので...。」

という、先生の配慮があったのでした。

ですが私の両親は、私が生まれたとき、既に在日韓国人として、ありのままに生

きていくという覚悟を心に決めていました。

「娘の作品が良いものであるなら，そのまま出品して下さい。何があっても，私達が責任を取ります。」

と願い出たのでした。

どうすれば良いのか，戸惑っていた私ですが，両親は，

「心配ないよ！」

と，笑顔で言ってくれました。

その後，何事もなく，私の新聞は入選しました。私はこの入選を，心から嬉しく思いました。ですが，自分のルーツについて，在日外国人であるということについて，発表することが，これほど周囲の人に心配をかけなければならないのかと，考え込んでしまったのでした。

確かに，韓国・朝鮮の人々は，戦争で，日本軍により，耐え難い苦痛を強いられたという，悲しい歴史的事実があります。差別の対象となる可能性に対して配慮しなければならないのかも知れません。けれども，現在の日本は，昔に比べて大きく発展し，人々の考え方も進歩しつつあるのだと，私は思うのです。テレビをつけると，外国人が大勢出演し，その国々の特色等をユーモアたっぷりに話してくれるという番組もあります。私たちのよく知っている芸能人が，楽しく司会をしています。今まで知り得なかった外国の現状や人々のくらしが，手に取るように，画面を通して伝えられているのです。日本に住む私達にとっては，国際理解につながる情報源の一つとなっています。

現在，日本には多くの外国人が暮らしています。日本に住む人々の心が国際化し，日本人が昔から持っている「思いやり」や「まごころ」を忘れなければ，私達の人権は守られ，日本はもっと素敵な国になると思います。

私は日本と韓国，二つの国の文化を持つ存在として生まれてきました。私にしかできない役割があると思います。在日韓国人であることに自信を持ち，自分らしく前を向いて生きていきたいと思います。将来は，人と人の心をつなぐ架け橋となり，日本に来る人々を笑顔で迎える仕事に就きたいと考えています。